



TITLE:

# 北朝政局に於ける鮮卑及諸北族系 貴族の地位

AUTHOR(S):

内田, 吟風

---

CITATION:

内田, 吟風. 北朝政局に於ける鮮卑及諸北族系貴族の地位. 東洋史研究  
1936, 1(3): 209-225

ISSUE DATE:

1936-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/142943>

RIGHT:

# 東洋史研究

第一卷  
第三號

昭和十一年二月發行

## 北朝政局に於ける鮮卑及諸北族系貴族の地位

内 田 吟 風

### 一、緒 言

二、北魏に於ける部の解散 魏初の部制度——道武帝の諸部解散

三、北族系貴族の發生 八國制の暫行——八國制の崩壞

四、北魏の北系貴族冷遇 北系貴族の沈淪——北族武人の不滿——邊鎮北族の賤民化——北人擡頭と北魏滅亡

五、齊周政局に於ける鮮卑の優勢 北系貴族の顯榮——北齊高氏と鮮卑——北齊と鮮卑語胡俗——漢人抑壓

——鮮卑宇文氏——北周の虜姓再行——周官施行の理由——北周の胡俗鮮卑語

### 六、結 語

### 一、緒 言

北魏は云ふ迄も無く東胡民族鮮卑種に屬する拓跋氏が鮮卑及諸北方蠻族群を率ゐて中原に侵入し、漢族を平定し江北

を統一して建てた北朝最初の蠻族王朝である。従つてこの北魏が國家統治上最も苦心した問題は實に、其始め中原平定の爲に引率し來つた處の（其他既に五胡亂時代より侵入し居たる）多數の同族鮮卑種並に諸北方蠻民——彼等は大人即ち酋長に統率されて多數の部を作つてゐた——を如何に處分し、以て郡縣制の北魏帝國の治下に包容し了へるか云ふ事であつた（五胡亂諸國では漢人には郡縣制、蠻族には①單于左右輔下に各自部族制を保持せしめた）。

本論文は北魏に於けるこの北方蠻族群の處分即ち「部の解散」と、其等に據つて發生した北方系貴族が其後北魏北齊北周の北朝諸王朝に於て如何なる政治的地位に在り、其政局に如何なる影響を與へたものであるかと云ふ事に就いて考察せんとするものである。

註① 史林第二十卷第三號所載「五胡亂及び北魏に於ける匈奴」第四節參照。

② 茲に言ふ北方系貴族とは北魏の諸部解散直後に賜爵された氏族のみでなく、北齊北周に於て軍功等によりて爵を得たもの、更に單なる北族土豪として地方政局に關係あつたもの等までもを含めたもので、是等は多く所謂酋長庶長の子孫であつた。勿論當時一般部族民の子孫が平民即編戸として多數に存在したのであるが、其等の政治的地位に就ては唯本論後章に説く鮮卑軍團の兵士が其等北族編戸より採用されたものに依つて組織されてゐたであらう事を推察し得るのみで、殆ど見る可きものが無いかから本論に於ては觸れない。

## 二、北魏に於ける部の解散

北魏の太祖道武帝（拓跋珪）は登國初年嚴命を發して諸部を解散し分土定居せしめて遷徙を許さず、諸部君長大人をも皆編戸と同じうした。

魏初の部制度。

元來拓跋の統率した北蠻諸部族の數に關しては

魏氏之初統國三十六大姓九十九（北魏書帝紀）。

魏初有四十六部（北史獨孤信傳）。

後魏遷洛、有八氏十姓、咸出帝族、又有三十六族、則諸國之從魏者。九十二姓世爲部落大人者（隋書經籍志）。

とあるが、是等は拓跋下の主要部族を示すもので、堂々南下中原を掩有せんとする頃には附隸するもの既に數百千部に及んだ事は、北齊北周書列傳等に見ゆる魏初諸部大人下の群小諸部の多數なりし事に依つても疑ない處である。

拓跋氏はこの多數の諸部族を其時々<sup>（什翼）</sup>の狀態により或は七部（獻帝・魏官氏志）三部（昭帝・魏書帝紀）二部（昭成帝・魏書帝紀其他）大人に分統管轄せしめたのであつて、道武帝の先代昭成帝（什翼）の時代に於ては其部民の多少に依り其君長をも酋長或は庶長と區別

して稱へ、之を南北二部に分屬し南北二部大人が之を統攝したのである（官氏志）①。「昭成帝が前秦苻堅に破られ長安に禽抑

せられてゐた間も、苻堅は北魏（以下便宜上多く北魏を以て拓跋・代をも總稱する）從來の部組織を破壊せず、舊拓跋下の諸部君長は年々歲末に長安に犍を訪れ、且つ矢張り南北二部に分攝せられ（魏書帝紀）、其税は犍に給されてゐた（南齊書魏虜傳）。

道武帝珪が苻氏の羈絆を脱し再び國力を伸張するに及んでも、勿論最初は此の部族制を改める事なく、登國元年には苻堅任命の二部大人の代りに股肱の臣長孫嵩を南部大人に叔孫普洛を北部大人としたのである（魏書帝紀官氏志）。

**部・部大人の名稱** 元來部と云ひ部大人と云ふも時代の前後により大いに性質を異にする。古代東胡に在つては「有勇健能理決鬪訟者、推爲大人、無世業相繼。邑落各有小帥（三國志所引魏書）、邑落各有小帥・不世繼也」數百千落自爲一部。大人以下各自畜牧營產、不相徭役（後漢書烏桓傳）」又「大人能作弓矢勒銀金鐵爲兵器、能刺章作文繡織縫毼毼、有疾知以艾灸（三國志所引魏書）」とあつて、部は數百千の邑落——其小邑落には各不世襲の小帥がある——の集合で、其長たる部大人とは勇健能く鬪訟を理決し、兵器氈織醫療等の技に通ぜる有能者を部人中より選舉推戴した、不世襲の指導者に過ぎなかつたのである。

東胡は斯様な原始的な自治的部組織を略々後漢末三國前期頃迄續けて來たが、其頃に至り匈奴の全面的退敗と漢土の大動亂に影響されて東胡民族の邊頭となり同時に斯様な原始的な自治制度の廢棄が促進され、部大人は強大氏族の世襲となり部人は其臣下となつて結合し攻伐に當るに至つた。彼の有名なる鮮卑酋長軻比能、同檀石槐の如き「軻比能本小種鮮卑、以勇健斷法平端不貪財物、衆推以爲大人（三國志）」「鮮卑檀石槐勇健有智略、異部大人抄取其外家牛羊、檀石槐單騎追擊之、悉還得所亡者、由是部落畏服、遂推以爲大人（後漢書）」と何れも從來通り部人に推選されて大人と爲つたが、軻比能歿後は弟素利彌加闕機素利槐頭。……中部十餘邑、其大人曰柯最居慕容寺。……西部二十餘邑、其大人曰置難落日律推演宴荔游等。……而制屬檀石槐（三國志所引魏書）」によつても明かである如く此頃には既に諸部落の併吞、分統が行はれ出した事が解る。

拓跋氏に於ても北魏書北史帝紀の冒頭に見ゆる「節皇帝諱貸立崩、莊皇帝諱觀立崩……」と云ふ十一帝の何等相續關係を示さぬ皇帝の立崩記事は（王鳴盛はこの帝名を全然假作と見るも）實に上述の東胡古俗の原始自治的選舉大人の立崩を記したものと見る可く諸汾に至つて始めて世襲の事が見え而して力微以後歷世諸部の併吞を行ひ遂に前述の如き大勢力と爲つたのである。が、諸部大人の各自部民に對する支配權を縮少することなく、賀蘭部の如きは特に強大であつた。而して其等大人が國政に參議した例も容易に見出し得るのである。尙魏書北史共に北魏諸部落酋帥を何部（部落名）大人と記し、又其等諸部落大人を統攝する拓跋の重臣をも何部（多く東西南北等）大人と呼び、更に其後部族解散後の國務大臣をも尙は何々大人（例ば天部大人）と呼んでゐる。同じく大人と云ふも其時其事柄に依り判斷區別して考ふ必要がある譯である。

### 道武帝の諸部解散。

而るに道武帝珪が劉衛辰始め諸敵國を攻破併合して、部族生活を營まぬ多數の漢民をも統治することゝなるに及んで、茲に從來の部族制度の存廢と云ふ重大な問題が提起せられた譯である。元來五胡十六國時代の諸蠻族王朝に於ては、漢人に對しては皇帝として尙書以下の官吏による郡縣政治を行ひ蠻族民には部族生活を繼續せしめ、大單于として單于左右輔を以て其諸部を統攝せしめ、諸部酋長の各自部民に對する支配權（更に國政參議）を

も認めると云ふのが殆ど常であつたのに、道武は大英斷を以て斯かる姑息の二重政治を排し、諸部族の解散、部族民の編民化、郡縣制の一律強行を斷行した。道武が何故に斯様の斷行を爲し得たかと云ふに、彼の武力がこの部解散、大人の支配權剝奪による王權強化に充分であつた事、慕容氏其他敵國を降服併吞して其有能降民等を採用（例へば登國十年十一月、皇始元年九月の件）して拓跋王室の羽翼と爲して諸部（大人）を壓伏するに資し得た事の二つを其主要理由として挙げ得ると思ふ。

却説、魏書を見るに

（官氏志）凡此四方諸部歲時朝貢、登國初太祖散諸部落、始同爲編民

（賀訥傳）訥其先世君長、四方附國者數十部（中）道武離散諸部、分土定居、不聽遷徙、其君長大人皆同編戶、訥元舅甚見尊重、然無統領、以壽終於家

とあつて、道武帝の部解散が嚴格なもので最早舊大人は編戶に等しく、舊部民に對して支配權なく、分土定居せしめられて移轉の自由も無いと云ふ有様であつたことが解かる。尤も魏書高車傳には

太祖時分散諸部、唯高車以類麤獷、不任使役、故得別爲部落

と見え例外が無いではないが、然し少くとも登國初に解散が開始せられ、道武帝在位中に殆ど之が完了を告げたと認めてよいであらう。皇始元年には并州を平定し初て臺省を建て百官を置き將軍刺史太守尙書郎以下悉く文人を用ひ大いに漢人を登用した（紀<sup>帝</sup>）。北魏一代の北系強族抑壓に漢人重用を以てする政策及漢化政策は既にこの道武に於て見られるのである。

註① 以下單に帝紀官氏志等とあるは魏書の其を示す。

### 三、北族系貴族の發生

八國制度の暫行。

上述の如く道武の斷行により諸部は解散され部酋の支配權は剝奪せられて諸部の人々は編戶と爲り了り。地方行政上では今や全く普通州縣制下に收容された譯であるが、然し拓跋王朝が漢族に對して確固たる支配力を確立し且つ其支持を充分確實に受け得るに至る迄は、彼等北人は假令粗暴、動もすれば叛亂する（道武崩時でさへ）（とあ）底のものとは云へ尙拓跋王朝が必要不可欠の爪牙として彼等を放置する譯のものではない。即ち官氏志には

天興元年十二月置八部大夫（略）<sup>（中）</sup>其八部大夫於皇城四方四維面置一人、以擬八座、謂之八國。

天賜元年十一月以八國姓族難分、故國立大師小師令辨其宗黨、品舉人才、自八國以外郡各自立師、職分如八國、比今之中正也、宗室立宗師、亦如州郡八國之儀

とあり、彼等は特に皇城周圍八區に配置せられ進仕の上に於て他の普通郡民と異なる待遇を受け八部大夫（食貨志には八國民に對する部大夫と郡太守との職務の關係は詳細不明）を受けたことが示されてゐる。八國に於ける中正的職權ある大師小師の設置により進仕の路が開かれると共に、更に當時王公侯子四等の爵も設けられ、八國に住せる諸部子孫の部落解散により生業を失つた者約二千餘人が賜爵された（帝紀天賜元年）。是れ北朝北族系貴族發生の濫觴と見るべきものであらう。其後太武帝の夏涼燕討滅の時に於ける勳功を以て賜爵されたものも亦枚舉に遑がない、尙官氏志に見ゆる天賜四年八國の良家を選て待官と爲した事も此に述べた八國大小師の手に據つてなされたものと考へられる。

八國制の崩壞。

この八國制も明元帝太武帝の代を経て次第に縮少崩壞した如く、明元帝時代にはこの八國は事實上六國即ち六部に縮少、太武帝時代には僅か四部に縮少せられたのであつて、彼の極端なる漢化政策漢人重用主義の孝文帝時代に至つては僅かに其殘骸かと思はるゝ六師の名を認め得るのみで、實質上八國は消滅した如く考へられる。

此の八國制の縮少並に崩壊の原因は、其直接明記の史料に缺くも、恐らく當時盛に建設されつゝあつた北鎮（特に六鎮、即北魏邊境の軍政殖民地）への舊部酋出身の八國貴族の強制移住と、部解散による部酋の支配と庇護を失へる貧賤一般舊部民の窮亡流散であつたと思ふ。後者に就ては推察に止まるも、前者に就ては（後章にも述べる如く）魏齊周書各列傳の記事の明示する處である。而も根柢より此八國を崩壊し去つたのは、孝文帝の洛陽遷都（帝は北族の大反對を押切つて遷都を決定した、八國民にして帝に従ひ南徙せるものは河南郡民となつた）漢人門閥の官路獨占による八國民の特權喪失であると考へられる。

註① 泰常二年夏置六部大人官、有天部地部東西南北諸公爲之（官氏志）。泰常六年詔六部民羊滿百口調戎馬一匹（食貨志）とあり、明元帝の時は六部。世祖命尉眷與散騎常侍劉庫仁等八人、分典四部（尉眷傳）とあり太武帝の時は四部に減じて居た事を知る。孝文帝に至つては八國の存在を示す史實は最早何等認め難いのである。

#### 四、北魏の北系貴族冷遇

北系貴族の沈淪。

欽定歷代職官表は北魏八國制の頽廢を論じて

八國各置大師小師、卽如今（清）之（八旗）參領佐領也。特當時規制率略、遷洛以後頓忘舊風、八部之在平城者無所統率、以致六鎮淪胥、政歸高氏、代都舊姓竟不能共效干城、亦可以見其建置之不善矣

と、誠に北魏の代都舊姓を閑却したのは北魏滅亡の一因たるを失はぬ。漢族の北魏に重用せられたのは古く皇始年間に始り太武帝の大いに中原を拓き漢族を治するに及び、魏廷に於ける漢族の勢力も亦牢固たるに至つた。彼の崔浩の如き、大いに權勢を振ひ漢族を援用偏頗昇叙すること夥く（高允傳）、遂に北人の憤怨は國史編纂問題を假りて爆發し彼を仆したけれども政局に於ける漢人の優勢を變化すべくもなく、漢文化心醉の孝文帝の洛陽遷都に依つて大勢は最早完全に決したと考へられる。帝の國姓拓跋を元と改め代遷の北人を河南の民とし皆複姓を禁じて單姓に改め胡語胡服を禁じた



ことは有名な事である。而して親任する處は中州の名族儒士であつた。門地による選舉の法に於ては詔して、北方舊族穆(舊穆)陸(步六孤氏)賀(賀賴氏)劉(獨孤氏)樓(賀樓氏)于(勿忸氏)嵇(達奚氏)尉(尉遲氏)八姓は中州名門盧崔鄭王四姓に比敵すべく、舊部落大人にして皇始以來三世顯官に在つたもの(及舊部大人に非ずとも尙書以上)の官王公に登れるものを姓と爲し、大人の後にして顯れざりしも(及大人に非ずとも)の(顯官に登りしもの)を族と爲す如く規定せられたとは云へ、(官氏志)事實上志を得ず遂に胡俗を慕ふた太子恂の恒朔の不平北族を背景とした叛亂、北族勳臣穆泰陸叡が帝の中州儒士偏用を樂まざる宗室思譽隆業超等と結んでの大叛亂等となつたが、是等は何れも鎮壓せられ爲に却つて北系貴族の勢力は地を拂ひ、北魏政局に於ける漢族の地位は絶對的となり北族は宗室及び特別の姓族を除けば顯榮を得るものなく、大多數の群小北族貴族は終に沈淪を免れなかつたと言ふ外な<sup>①</sup>。

### 北族武人の不滿。

太和二十年十月詔して代遷の北人を皆羽林虎賁と爲し軍務を課したが(帝紀)、既に孝明帝神龜

二年には征西將軍張彝の子仲瑀(漢人)は封事して武人の選格を削り清品に預らしめず仕官の路を杜いだので、遂に羽林虎賁の暴動起り彝は邸を襲撃放火されて焚殺され、仲瑀は重傷を負はされたと云ふ椿事があつた(帝紀張彝傳)。時に胡太后は恐れて暴動鎮靜後武人も亦資格により選に入り官に就き得る事としたけれども事實上進仕し得た者は極めて稀であつて(同上及崔亮傳)正光末北鎮の北人の大反亂に及び領軍元叉は在京北人の向背の重大を知り勳附隊なるものを設けた時の

時天下無事、進仕路難、代遷之人多不露預、及六鎮隴西二方起逆、領軍元叉欲用代來寒人爲傳詔、以慰悅之、而牧守子孫投狀求者百余人、又因奏立勳附隊、令各依資出身、自是北人悉被收叙、(山偉北人)遂奏記贊又德美(山偉傳)と云ふ有様からでも如何に從來多數の北系姓族が沈淪して居たかゞ解る(元叉は結局六鎮の北人と通謀したと議せられ死を賜つた)。北史楊椿傳に見ゆ

自道武平中山、多置軍府(中略)凡有八軍、軍各配兵五千、食祿主帥、軍各四十六人、自中原稍定(中略)費祿不少、楊椿

(漢人) 表罷四人、減其主帥百八十四人

と云ふ事件の如きも、如何に北人が漢族政治家の爲に抑壓され剝削されてゐたかと云ふ一例であらう。

邊鎮北族の賤民化。

北鎮充實の爲に移住せしめられた北族系貴族も亦魏廷より極めて薄遇され、中州移住の北

族が單に仕進の路を杜がれ不遇であつた様な生溫いものでなく、彼等は時代の降るに隨ひ貴族としての特權を失ふたのみでなく、府戸として殆ど賤民に化したのである。(北鎮徙住の北族の數は莫大な數に上つたに相違なく、其等の子孫にして北齊北周に顯榮に達したものゝみでも相當の數に達してゐる齊周書に列傳を有するもの可朱渾元賀蘭詳獨孤信若干惠侯莫陳崇賀拔勝庫狄干宇文盛段永等々枚舉に遑がない。北魏書に於て其等の傳の皆無なのは彼等が魏代に於て沈淪し左様な列傳に載る如き地位に達せるものが無かつた證據である。)

北邊移住の北系貴族(正光五年の詔の語を假りて云へば良家酋帥)に對する魏廷の無關心寧ろ暴政は非常なものであつたらしく、孝明帝の代に尙書令李崇の長史魏蘭根は崇に

(昔)緣邊初置諸鎮(中略)徵發中原強宗子弟或國之肺腑、寄以爪牙、中年以來有司乖實、號曰府戸、役同厮養、官婚班齒致失清流(中略)宜改鎮立州(中略)凡是府戸悉免爲平人(下略)(北齊書)と説いたこと(李崇は之を上奏した、が用ひられなかつた)、既に北鎮破六韓拔陵の叛勃發の後に廣陽王深が

先朝都平城、以北邊爲重、盛簡親賢、擁麾作鎮(中略)得復除、當時人物忻慕爲之、太和中僕射李冲用事、涼州土人悉免厮役、帝鄉舊門、仍邊戍、自非得罪當世、莫肯與之爲伍(中略)或多逃逸、乃峻邊岳之格、鎮人不聽浮遊在外(中略)不得遊官(中略)自定鼎伊洛、邊任益輕(中略)邊人切齒(下略)(元深傳)

と上言した處とを合せ見ても、邊鎮北人が其貴族の特權を剝がれ、更に自由を奪れ、府戸として勞役に服する賤民に化し、中州姓族の蔑視排斥する處となつた事が解かる。斯様な政府の暴政に加へて、中央より派遣される鎮將等は鎮民を

驅使剝削し搜營窮壘苦役百端、偏に聚斂を事とし、鎮民疾苦溝瀆に死するもの十に七八とさへ云はれた程であつたから一度懷荒鎮民等及沃野鎮民破落汗拔陵(匈奴名族)が兵を擧げて反するに及び諸鎮響應、高平鎮赫連氏(匈奴名族)秦州薛氏(舊叱氏)莫折氏(舊須叱氏)涼州于氏(勿忸于氏)秀容乞伏氏(鮮卑名族)營州就氏(苑賴氏)柔玄鎮杜氏(獨孤氏)百侯氏(匈奴)宿氏(宿六斤氏)幽州叱干氏等々の鮮卑匈奴の族は宗黨を率ゐて續々叛し諸鎮瓦解、朝廷に於ても始めて前の李崇廣陽王深等の上奏を了解し(李崇傳)、正光五年八月詔して諸鎮軍戸の有罪配隸の者以外は總て之を免じて民と爲し、鎮を改めて州と爲し(北史魏書帝紀)、酈道元を大使として六鎮を慰撫せしめたが、時に六鎮盡く叛して行を果さず遂に拾收す可からざる事になつたのである。

北人の擡頭と北魏滅亡。

諸鎮北人の大叛亂に加へて柔然高車勒勒等の蠻族の侵寇熾烈と爲るに至り最早政權を斷斷して居た文弱の漢族及漢化した顯貴魏族等は如何とも出來ず、茲に再び北支那を支配し指導するものは舊北族貴族を措いては無く、破六韓拔陵が懷朔鎮を攻撃するに及び鎮將楊鈞は賀拔度拔(賀拔氏拓跋氏と同じ陰山に出ず祖)を統軍に、其三子允勝岳を軍主に擢き、偏に其力に依つて防禦し、又諸鎮陷落して僅かに雲中を以て防ぐ外なくなつた時衆望を擔つて刺史となり獨り悍拒に力めたのは代人費穆(舊費連氏、後爾朱榮に降り榮に勸めて洛陽に朝士の大虐殺をす)であり、賊將衛可孤を襲殺したのは武川鎮民宇文肱(北周太祖の父)、廣陽王深(北周太)の爲に叛胡を諭して鐵勒酋長等を來降せしめ拔陵を苦めたのは代人于栗磾六世の孫謹であり(北史北周書傳)、北人は云實は東南道行臺の統軍として西華の亂を鎮定した等々總て舊北族小貴族の力であつた。

斯様の状態にあり乍ら當時魏朝は北人を重用する法を知らず依然として漢人氏族のみを寵用して、路思令の如きは之を諫めて上疏した程であつた(路思令傳)に拘らず用ひず、爲に魏朝に對する北人の望は全く失はれ、北人與望は翕然北人豪家鎮民酋長爾朱氏に集り、賊軍官軍の別無く北人(例ば叱列延慶斛律椿樊子鵠賀拔勝允岳侯莫陳悅崇順段榮斛律金晃舉萬侯普洛破六韓常庫狄干張瓊慕容紹宗叱列平步大汗薩可朱渾元基連猛獨孤信若干惠其他無數)の投歸するもの極めて多かつた。爾朱榮が洛陽に上り胡騎を放つて魏帝太后貴顯の朝士數千人を虐殺したことに依り事實上漢族中心の魏朝は滅

亡し、以後は北族英雄の割據となり、やがて北齊北周の對立と爲つたのである。北魏滅亡の主因は實に群小北族貴族の支援を失つた事に存すると云つてよい。

**領民酋長** 魏朝破砕の第一槌を下した爾朱榮は北族系貴族の錚々たるもので、榮に就ては魏書北史に傳が有り詳述を要しないが、要するに爾朱氏は北蠻大酋の家で魏初軍功に依り秀容川の旁方三百里の地に封ぜられ世々繼いで領民酋長と爲り牛馬に富み朝廷貴顯の重する處であつた。洛陽伽藍記には爾朱榮世爲第一領民酋長博陵郡公、部落八千餘家、馬有數萬匹、富等天府と記されて居る。不平北族は此の大豪族の下に一先づ流歸し、其力を假つて北魏の顛覆に成功した譯である。

北魏は前述の如く諸部を解散し州郡制を强行したに不拘斯様な領民酋長が存置されたのは注目に價する。爾朱氏以外に魏世叱列氏乞伏氏高氏獨孤氏斛律氏も領民酋長であつた。道武帝が高車が餘りに生蠻であつたので州郡制に入れず部落制を許したと同じ様に此等領民酋長の所率も（爾朱は契胡、斛律は勅勒）生蠻の爲解散せられず其儘魏末に及んだものではあるまいか。爾朱榮自身相當北蠻の野性を保有して居た事は其行爲から容易に推察出来る。彼は魏末の北族の大保護者と云ふ可く、洛陽に入つても直ちに北人を河南諸地の牧守に推薦して敬帝と爭論して居る程である。官氏志は流外官を記載してないが、隋書百官志には北齊の制として「第一領民酋長流内比視官視從第三品」とあつて（榮も從第三品であつたから）、北魏に於ても大體其程度の官であつたらうと考へられる。

① 魏朝が何故に漢族を優遇し北族を抑壓したかに就ては簡単に説述し得る譯のものでないから今は觸れない。唯南朝との對立上漢人の支持は仲々必要であつた事、魏初北方強部が動もすれば離反獨立の傾向があつて抑壓の必要ありし事は其重大な原因と云ひ得る。

② 廷尉少卿袁纘（纘傳）其勇力之兵驅令抄掠、若值疆敵、卽爲奴虜、如有執獲、奪爲己富、其羸弱老小之輩、微解金鐵之工、少閑草木之作、無不搜營窮壘、苦役百端、自余或伐木深山、或芸草平陸（中略）疾苦死於溝瀆者常十七八。によつても、又源懷が領將等が民の美田を奪ふ事を述べた上表等によつても其暴狀を知り得る。

## 五、齊周政局に於ける鮮卑の優勢

齊周鮮卑の顯榮。

北魏の支配階級が漢人門閥並に漢化した極少數の北方姓族に占められて居たのに對し、北齊北周では全く反對に鮮卑其他の北族出身の貴族が幅を利かしたと言ふ可きである。齊周政局の中心が北人の手に有つた事は北齊書周書を續けば直ちに了解出来る處で、北齊太宰庫狄干、一門一皇后二太子妃三公主の左丞相斛律金順陽郡王太子大師庫狄廻華陽縣公持進庫狄盛都昌縣公肆州刺史加開府儀同三司薛孤延其他張保落段琛侯莫陳崇斛律羌舉慕容紹宗叱列平步大汗薩慕容儼高乾王紇可朱渾元破六韓常慕容猛、北周廣城郡公小司寇右二軍總管段永安豐郡公小師庫狄峙樂川郡公大將軍夏州總管赫連達涼國公賀蘭祥太傅達奚武大將軍荊州總管侯莫陳順大司徒侯莫陳崇大司寇豆盧寧其他宇文盛叱列伏龜等々の事を一々述べては際限も無いから述べない。

北齊高氏と鮮卑。

北齊高祖高歡は渤海蓆人なれば漢人であるが、然し既に五世の祖慶より三代の間鮮卑慕容氏に仕へ、曾祖湖より北魏に仕へ祖謚より法に坐して懷朔鎮に徙居したものであるから、高氏は名は漢人でも實際は鮮卑に近かつたであらう事は容易に了解出来るやう。北齊書帝紀に「神武既累世北邊故習其俗遂同鮮卑」とあるも決して誇張の言ではない。高歡の後妻氏の如きは純然たる鮮卑の豪族で、彼は其財力を假りて大業の第一步を踏出したものである。従つて歡と妻氏との間に出來た長子澄（世宗文襄帝）は正しく鮮卑で、候景の如きも澄を鮮卑小兒と呼んでゐる。

（北齊書  
帝紀）程である。

高歡は幼にして孤となり姉姪なる鎮獄隊尉景に育てられ貧窮の裡に長じ妻妻氏の財力に依り鎮獄主を務める事となつたが北鎮の亂起るに及び叛民柔元鎮杜洛周の軍に投じ更に賊葛榮に奔つたが、結局爾朱榮に歸降した。爾朱氏は北鎮の叛亂を討平して其降民を歡に委ねた。この爲に歡は大勢力を得、北齊建國の基礎を立てたのであつて、彼自身魏室に反感を有した北人の一人であつたと言つても殆ど差支へあるまい。河陰の變後爾朱榮に魏室を亡して帝位に即く可しと勸説したのも實に彼である。<sup>①</sup>

彼は全く北人を利用し其支持を以て大業を成したのであるから、彼が大いに鮮卑中心主義であつたのも無理はない。<sup>②</sup>高歡が魏帝節閔帝を廢し孝武帝を立てた時、彼は其即位禮に鮮卑舊禮を復用し、先づ孝武を氍毹帳に入れて踐祚を乞ひ東郊に舉禮したが、北史には其時の事を記して

用代都舊制、以黑氍毹七人、高歡居其一、帝於氍毹上西向拜天、訖自東陽雲龍門入（通鑑胡注曰、宣武孝明即位皆用漢魏之制今復用夷禮）

とある。又高洋が東魏を奪つて自ら帝位に登らんとした時には北蠻の常に行ふ鑄金造像の法を以て成否を卜つて居る。

北齊に於ける鮮卑の優勢。

當時の鮮卑語流通も鮮卑族の政治的優勢を示す一の證據である。當時宣傳號令には皆鮮卑語を必要とし

孫肇文甚美（中）專與文筆、又能通鮮卑語、兼宣傳號令、當煩劇之任（北史北齊書列傳）

并州定國寺成、神武謂陳元康溫子昇曰（上）今定國寺碑、當使誰作詞也、元康因薦祖珽才學並解鮮卑語、乃給筆札、

就禁所具草、二日內成、其文甚麗（北齊書祖珽傳）

とあつて、文筆を以て仕ふる者にも如何に鮮卑語の素養が必要であつたかゞ解る。北齊顏子推の「顏氏家訓」に鮮卑語習得の要を述べてあるのも決して不思議でない。高祖自身も多く鮮卑語を用ひたことは

于時鮮卑共輕中華朝士、唯憚服於昂、高祖每申令三軍、常鮮卑語、昂若在列、則爲華言（北齊書卷廿一）

と云ふ記事からも知り得る。又この記事から特に軍隊では鮮卑語が使用されて居たであらうことが推察できる。なほ此の記事中に見える鮮卑共輕中華朝士なる句も注目に價するであらう。此の風潮は失張り軍隊に於て甚しかつたのか、北齊後主に寵遇された祖珽が領軍を望んだ時北人側より「孝徵漢人、兩目又盲、豈可爲領軍」と反對が出て彼が漢人である事が一つの理由となつて實現しなかつたこともあつた。

文宣帝は史籍の上で無類の暴主とされて居るが、是も一つには鮮卑其他の北族出身者のみを重用して漢族を抑へた爲

に、五胡亂の後趙石虎と同様漢人史家より嫌惡され、其缺點を誇張されて居る處があると思はれる。例へば彼が從者と共に胡服し駝牛馬に鞍勒を施さず盛暑炎赫或は隆冬酷寒の中を袒裸馳騁した事などを彼の狂惡の所業として擧げられてゐる（北齊書帝紀其他）が、斯様な事も彼が嘗て高澄治下で失意の時代に常に袒跣奔躍して身體の鍛練に資した事を併せ考へれば、寧ろ彼が北人常習の戰鬪訓練を行つたと見る可きであらう。彼は大いに鮮卑軍團の充實に力め

及文宣受禪、多所創革、六坊（北魏の禁衛鮮卑軍戸）之内徙者、更加簡練、每一人必當百人、任其臨陣必死、然後取之、謂之

百保鮮卑（隋書食貨志）

と百保鮮卑などと稱する精銳軍を組織したり、又軍府を建設したり（北史卷五十五）してゐる。又

顯祖（文宣）嘗問杜弼云、治國當用何人、對曰鮮卑車馬客、會須用中國人、顯祖以爲此言譏我（北齊書卷二四）

顯祖斬高德政、後顯祖謂群臣曰高德政常言、宜用漢人、除鮮卑、此卽合死（同上卷三十）

と言ふ二事件を見ても鮮卑の優勢を知り得る。この高德政も常に漢人第一を主張したのでは無く、嘗て文宣皇后李氏（漢人）を立つることに反對し「漢婦人不可爲天下母」と言ひ后を廢さんことを文宣に説いたこともある程で、實に誤つて舌禍を得たと云ふ可きであらう（尙李氏は元妃たるの故を以て廢せられず後には可賀敦皇后になつた）。高歡は常に鮮卑人に對し「漢人は鮮卑の奴隸である」と云つて居たが、後主の時韓鳳（昌黎の人と云ふも恐らく北人出大于氏の子孫）等は漢族士人を嫌惡蔑視し朝士等は敢て仰視し得なかつたが、彼は常に

漢狗大不可耐、唯須殺却

と罵り、又實際に齊主に讒して含章殿に諸漢官を斬つた事さへあつたのである<sup>④</sup>。

鮮卑北周宇文氏。

北周も鮮卑色濃厚の上では仲々北齊に劣らない。唯北周は、北齊の文宣武成の如き諸君主が北蠻的行爲を恣にして後世漢人史家より誇大に筆誅を加へられたに反し、北周諸君主が巧みに漢文化尊重を以て鮮卑の

政治上の專勢を擬裝し得た爲に漢人史家の筆誅を免れたが、其實其政策は北族の政權強化を疎かにするものではなかつた。

北周宇文氏は純然たる鮮卑である。其祖は鮮卑十二部を總攝した强大部大人であつたが鮮卑慕容部に併合せられ、慕容部破るゝに至り拓跋部に屬し、北魏天興年間例により武川鎮に移住され、其鎮民となつたものである。太祖泰の父は正光末の北鎮擾亂に郷里を糾合して賊鮮于修禮の軍に投じて戰歿し、泰は賊葛榮に奔り、後爾朱氏に投じて重用され北族賀拔岳等の支援を得て遂に大業を成したものである（魏書が宇文を匈奴とするは曲筆、晋書范亨燕書其他によりても宇文の鮮卑たるは明なり）。

虜姓の再行。

宇文泰が虜姓を復活し北人漢人の差なく複姓を與へたことは有名な事である。楊紹叱利氏劉雄宇文氏侯植賀屯氏陸通步六孤氏楊纂莫胡盧氏段永爾綿氏寇儁若口引氏韓優侯呂陵氏趙肅乙弗氏樊深萬紐于氏王德烏丸氏劉亮莫陳氏楊忠普六如氏王盟拓跋氏蘇椿賀蘭氏辛威普毛氏田弘紇干氏李弼徒何氏（以上各列傳）の如き其一例である。太統十五年、太和年間に虜姓を改めて單姓となつたものを總て其舊に復せしめたこと、全く北魏孝文帝の漢化政策と正反對である。

虜姓復活と周官施行の理由。

民族的自尊心の強い漢人が虜姓を與へられて其れを唯々として受ける。それは嘗て魏初平原王拓跋勰が冠族崔監の女を娶らんとした時、監が所親に「平原王才度不惡、但恨其姓名殊爲重複（北史卷二十八）」と漏らしたのに照らし、如何に北周に於て鮮卑の前に漢人が屈伏してゐたかの證據である。然し何故に宇文氏が斯様な複姓再行を爲したのであらうか。先第一には北魏の漢化政策によつて沈淪を免れなかつた北人等——其支持によつて周室は立つてゐた——の反漢感情復古思想に投ずる爲であり、第二に漢人姓族に虜姓を附與して漢蠻を混じ門閥寒門を識別し難くし、且つ同一族の者等にも種々異つた虜姓を分與する事により大門閥の發生進出を防止せんとするものであつたと考へられる。周官制度採用も此の第二の理由と相通するもので、官制改革に當り周禮による周官採用と稱することは



先づ其名儀の上に於て復古禮讃の漢族人士の反對を封じ去り得、實質上に於ては魏晉以來の政治上の積弊特に門閥の跋扈を一掃し得るに便であり、周室に功勞ある者は鮮卑たると寒族たるを問はず何等支障なく自由に之を登用し得る結果を齎すからであつたと考へられる。北周政局の樞要を殆ど總て北族貴族が占めて大いに活躍し得たのは、背後に斯様な注意深い政策が存した事によるとも言ひ得よう。

北周に於ける胡俗。

事實周禮周官など、稱し乍ら服制等は北周末期に至る迄胡服であつたとさへ思はれる。即ち大象元年宣帝即位の禮に關し、隋書禮儀志には

宣帝即位受朝於路門、初服通天冠絳紗袍、群臣皆漢魏衣冠。大象元年制冕二十四旒衣服二十四章、爲準。

とあり、資治通鑑には之を「周主始與臣、服漢魏衣冠」と書改め、胡三省は「以此、知後周之君臣前此蓋胡服也」と註してゐる。恐らく隋書禮儀志に見える北周の服制等は殆ど大象以後の制定で、其以前は胡服であつたと見る可きであらう。又隋書禮儀志は北周に「拜胡天神」の夷禮あつたことを記し擯斥してゐる。

言語に於ても一々例を擧げる煩を避けるが、高祖武帝が北齊を征し名士李德林を獲て大いに喜び群臣に對し鮮卑語を以て歡語し紇豆陵毅が其に應答したこと(隋書卷四十二)や、荊州刺史孫儉が梁の岳陽王の内附に當り其使者に對し大いに鮮卑語を以て語り使者は恐れて仰視し得なかつたこと(周書卷二十六)周書各所に鮮卑語の單語の散見するなどは北周に於ても北齊同様鮮卑語の流行の一端を物語るものに外ならない。本章頭初に述べた通り顯貴は殆ど總て鮮卑族であり、又實際朝貴の多くが段氏(段匹磾の後)の舊部民に占められてゐたり、河陽鎮防が悉く鮮卑であつたと云ふ状態であつたのであるから鮮卑語盛行も亦寧ろ當然と云ふ可きであらう。

註① 周書賀拔勝傳。十七史商榷參照。

② 北史卷卅六、隋書食貨志 北齊書帝紀

- ③ 史林第二十卷第三號所載(内田)五胡亂及北魏に於ける匈奴參照。  
 ④ 周書恩倖傳。通鑑陳紀五參照(現行北齊書の傳には狗漢とあるも通鑑は漢狗となして居る)  
 ⑤ 于時朝貴多其部民 謁永之日冠蓋盈路(周書段永傳)  
 ⑥ 周書卷卅一、北史卷六十四。

## 六、結 語

要するに北魏は鮮卑及諸北族を中央集權の帝國の州郡制に收容する爲に部を解散したが、其解散後に於て舊部民に對する恩遇に甚だ缺くものあり、北族系群小貴族は沈淪を免れなかつた。然るに其憤怨は北鎮の叛亂と爲り結局北魏は滅亡し、北族系貴族等の絶大な支持を受けた北齊北周の興隆を見、從つて兩朝に於いて北族は極めて優位を保ち、言語習俗等の上にも鮮卑色濃厚なるものがあつた。

而してこの傾向も隋に至つて調整せられ(例ば周官複姓の廢止等)やがて唐代の漢蠻融合の社會文化の出現となつたのであつて、北朝時代は實に(北支に於いて)五胡十六國時代より唐代に至る間の漢蠻融合上の一大過渡期に外ならず其間漢蠻兩者の政治上の地位に於ても上述の如き反轉動搖を免れなかつたのである。

(二一・二〇稿)